

うるくの歴史と文化を語る会
会報ガジャンビラ
 第10号

発行：うるくの歴史と文化を語る会
 発行人：當間一郎 編集人：赤嶺和雄
 〒901-0153
 那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内
 TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486

田原まーい（第5回うるくまーい）

うるくの歴史と文化を語る会副代表 赤嶺 健治

平成20年12月21日（日）に実施された、当会主催による第5回うるくまーいは、会員とその家族が27名も参加し、盛況裡に終了した。今回は、字田原地域のフェーメーシチャグイ（南前下庫理）のウーフール（豚小屋兼便所）、金城善栄氏報徳碑（田原出身2人目の小禄村8代目村長）、カテーラムイ（寿山）の旧海軍壕、梵字碑、ソージガ、ニービジュル（殿内ヌビジュル）、田原火神、堀川火神ほかを実地見学するコースであった。

当日は、午後2時にJAおきなわ小禄支店前に集合し、田原出身の上原勝男さんと本会会員で沖縄大学と沖縄国際大学で非常勤講師として民俗学を教えている波平エリ子さんの案内で、ウォーキングよろしく、3時間にわたって、歩き回った。

特に印象深かったのは、寿山旧海軍壕で、那覇市の説明板によれば、小禄飛行場防衛のため、海軍少将大田実司令官の指揮下に編成された連合陸戦部隊の巖部隊の本部陣地壕で、1944年末に住民も動員した突貫工事で完成した。

総延長350mの、多岐の迷路構造で、司令室、通信室、当直将校室、発電室などの形跡が残っている。最大1000人余の将兵・住民がいたという。1945年6月、上陸した米軍の猛攻撃で数日で制圧されたという。私たちは、壕内で黙祷を捧げ、「戦争二度と許すまじ」との非戦の誓いを新たにした。

小禄小学校裏手にある、さながら玉陵の様な莊厳な構えの門中墓群には圧倒された。今回の田原巡りは、田原地域の豊かな歴史と文化を肌で感じる貴重な体験であった。

最後に、案内をして下さった上原勝男さんと説明資料や壕用のヘルメットまで準備して下さった波平エリ子さんと手伝ってくれた若者たちに、改めてお礼を申し上げます。



① 出発前に記念撮影

田原まーい 講師に波平エリ子（沖縄大学・沖縄国際大学非常勤講師）

（資料に見る小禄・田原）

- ・ウルク（オロク）の称は烏魯古結制（1438年、正統3年10月「山南王併壊機文稿」歴代宝案第一集卷43）の人物名で現れるのが最初。琉球国國相壊機の代理として口羅国へ派遣された高官であるが、人物は特定できない。
- ・次に宜野湾市嘉数の小禄墓の墓内石厨子（石棺）に弘治7年（1494年6月吉日）で「おろく大やくもい」の浮彫名で「大やくもい」の役職名の最古の資料で、また琉球最古の仮名表記とされる。人物は特定できない。



② 講師波平エリ子の説明

- ・小禄間切は1673年（尚貞王5年）、真和志間切3邑を、豊見城間切8邑を合わせて設置される。尚熙（金武王子朝興）・毛文祥（小禄親方盛聖）に与えられた。
- ・その後4邑が新設され、15邑となる。
- ・『琉球一件帳』（1820年頃）

小禄・儀間・金城・具志・大嶺・赤嶺・安次嶺・当間・湖城・宇栄原・松川・翠宮城・高良・堀川・田原の15邑

<堀川村>

- ・堀川村の名は『絵図郷村帳』（1649年）、『琉球国高究帳』（17c 初期）、『琉球国由来記』（1713年）に記載なし。『琉球国由来記』には、小禄の殿での稻穂祭に堀川大屋子・田原大

屋子が神酒・麦・仙香などの供物を捧げるとある。

- ・『琉球国惣絵図』(1781(尚穆王30)~98(尚温4)年の間に作成されたとみられる極彩色の「間切集成図」)に小禄村の北西に村名と集落が記載されている。
- ・『球陽』(尚穆王42年、1793年条)では、小禄・田原・堀川の3ヶ村は一人の掟役が管轄していたが、1793年に田原掟を新設し、田原・堀川2村を所管させたということから、小禄村より分村したことがわかる。
- ・堀川村根所といわれる家で現在も祭祀が行われている。
- ・1880年(明治13年)の県統計概表で戸数41・人口240人



③ 金城善栄報徳碑



④ 南前下庫理(フェーメーシーチャグイ)のフル

③ 金城善栄報徳碑 (田原出身2人目の小禄村8代目村長)・アカナームイ御嶽・ジマーラガー

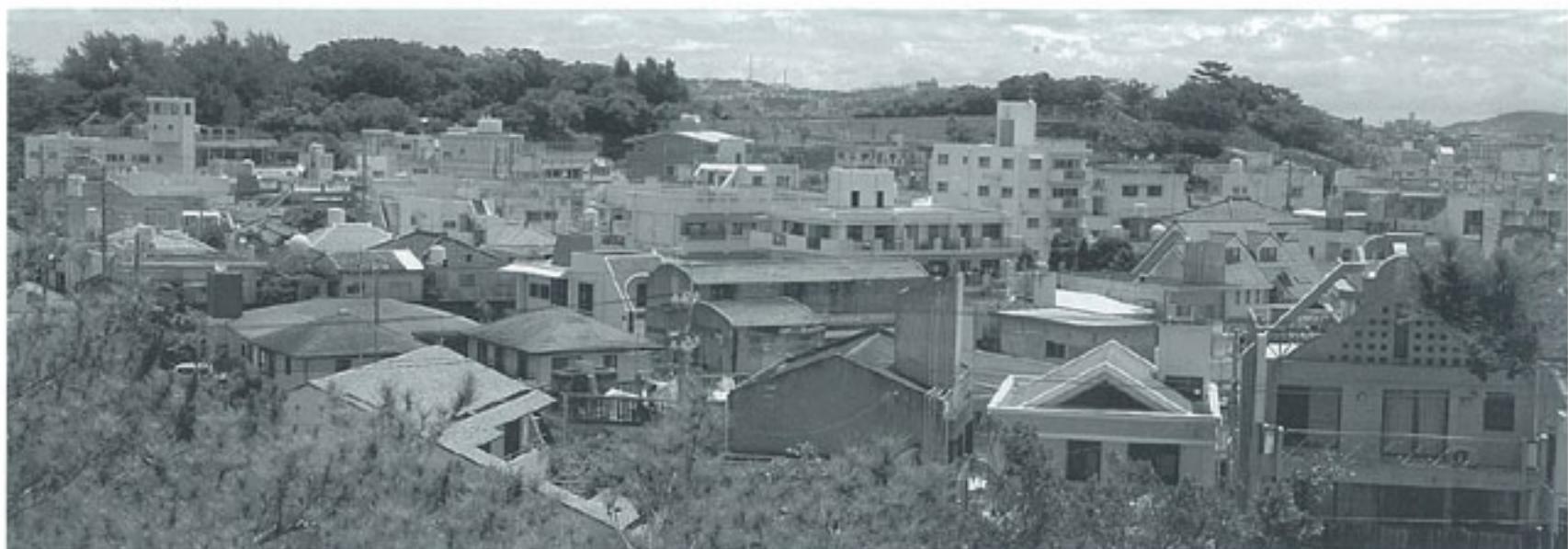
- ・明治29年(1896)生まれ。田原村、屋号〈新金城〉の出身。
- ・昭和16年(1941)に小禄村長に就任、二市二村(那覇市・首里市・真和志村・小禄村)の合併問題・非常時体制下のもと食糧増産・疎開問題などに努力。昭和20年6月、善子夫人と小禄村字高良の津真田壕内にて自決。

④ 南前下庫理(フェーメーシーチャグイ)のフル

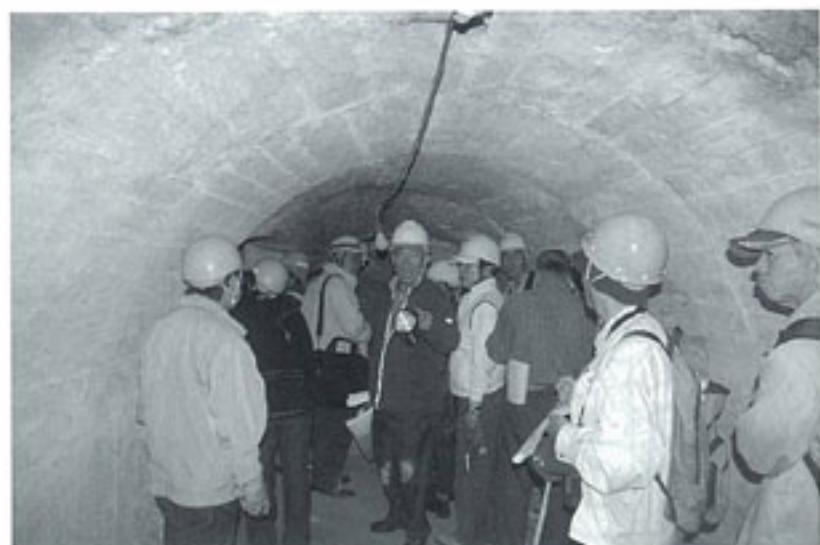
- ・戦前、瓦屋であった家ー〈南前下庫理〉〈仲前金城〉〈入金城〉〈与儀〉〈質屋のおばーさん〉〈南百次?〉

⑤ (田原村)

- ・田原村の名は『絵図郷村帳』(1649年)、『琉球国高究帳』(17c初期)、『琉球国由来記』(1713年)に記載なし。『琉球国由来記』には、小禄の殿での稻穂祭に堀川大屋子・田原大屋子が神酒・麦・仙香などの供物を捧げるとある。
- ・『琉球国惣絵図』(1781年(尚穆王~尚温王))の間に作成されたとみられる極彩色の「間切集成図」に堀川村の北に村名と集落が記載されている。
- ・『球陽』(尚穆王42年、1793年条)では、小禄・田原・堀川の3ヶ村は一人の掟役が管轄していたが、1793年に田原掟を新設し、田原・堀川2村を所管させたということから、小禄村より分村したことがわかる。
- ・殿内は田原村根所といわれる。
- ・1880年(明治13年)の県統計概表で戸数40・人口224人



⑤ ことぶき山(カテーラムイ)から田原集落を望む、上方の緑は森口公園・字小禄の殿。



⑥ ことぶき山（カテーラムイ）の壕



⑥ 司令室の戦没者之碑



⑦ ウン・ボロン梵字碑

⑥ カテーラムイ（ことぶき山）の壕

- ・巖舞台の配置とともに、本部壕として1944年8月から12月に突貫工事で造られた。（大田司令官の指揮下の元、小禄飛行場の防衛を主に小禄・豊見城一帯に連合陸戦部隊を編成。兵力一万人（防衛召集兵を含む）の配置）。巖部隊（南西諸島海軍航空隊）は兵員3000人。

ことぶき山と命名された海軍巖部隊本部壕、総延長数300mの人口壕は約1000名の兵を収容し、巖部隊の司令室、通信科、当直将校室、主計科、発電室などがあった。米軍は終戦まで同壕を攻め落とすことができなかったという。海軍の補充要員だけでは独立した作戦行動がとれる訳が無く、陸軍の総予備軍とならざるを得なかった海軍沖縄根拠地隊。その内巖部隊の兵力は約3000名、壊滅寸前の6/14の推定兵力は約250名、6/30の残存兵25名。9/5の武装解除には海軍残存兵120名しか残っていない。ことぶき壕は現在那覇市が管理、勝手に入壕はできない。

⑦ ウン・ボロン梵字碑

- ・後藤芳雄氏によれば、広報高台を整理した時に土中より出てきたという。祖母の意見で石敢當代わりに現在地に建てたという。
- ・〈仲百次〉（現、仲百次二男）の屋敷地外側の道傍に安置。

⑧ アカモー（アカムイ、デイゴ公園）

- ・2006年11月24日に現、デイゴ公園の鉄塔建設工事中に東屋辺りから遺骨が出た。戦前門中墓があり、戦後はアカモー一帯が米軍用地として接収され、近年返還された。遺骨は戦前の門中墓に葬られたものではないかと思われる。（金城栄行・上原セイイチ談）
- ・昭和30年前後の頃、学事奨励会がムラヤーにて行われ、鉛筆やノートが小学生～中学生に配られた。中学生は、恥ずかしがって参加する子はあまりいなかったという。ムラヤーでの奨励会後は、アカムイで自治会長による訓示があった。

⑨ ソージガー

- ・ソージガーとアカナーレのクサイヌカ（上原ハツ子さん宅ちかくの角にある井戸）と並んで、水量豊富な井戸であった。
- ・飲料水としてジマーラガーやソージガーはよく利用された。屋敷内井戸は主な生活用水として利用。



⑧ アカモー（アカムイ・デイゴ公園）



⑨ ソージガー 地図569



⑤ことぶき山(カテーラムイ・田原公園)を望む



⑦ウン・ボロン梵字碑 地図659



⑩堀川火ヌ神 地図385



殿内ヌビジュル 地図408



⑪田原火ヌ神 地図383





那覇市歴史地図（那覇市教育委員会）



⑧アカムイ(アカムイ・ディゴ公園)



⑨ソージガー 地図569



⑩殿内の神家

- 346金城ノ巖 • 382地頭火ヌ神
- 383田原火ヌ神 • 385堀川火ヌ神
- 408ニービジュル • 554森口ガ-
- 560ターガー • 561イリガーガー
- 565バンヌカ-
- 570メースカ-
- 663原石 • 787アシビナ
- 790フッチャームイ • 792クガニムイ
- 793ジーママーチュー
- 794アカナームイ • 851田原の神道
- ⑤ことぶき山 ⑥ことぶき山塚
- ⑧アカムイ
- ⑩殿内の神家
- ⑪(仲兼盛)の所のカ-



⑯ 田原火ヌ神 地図383



⑰ クガニームイ 地図792

⑯ 田原火ヌ神

・戦前から現在地にあったが、たんに「ヒヌカン」としか呼んでなかった。左側の道の半分ほどの畦道があり、敷地はもう少し大きかった。草刈りをするのがたいへんであった。30~40年ほど前に現在のコンクリート製の祠に改修された。

⑰ クガニームイ

〈堀川火ヌ神クサイガー?〉—高良ミヨ談

・チンジュ(隣近所)の人々が利用した井戸で、年中行事で押む時と押まない時があったりする。

⑲・戦前は「(仲兼盛)のところのカ一」と呼んでいた。

〈クガニ森クサイヌカ一〉

・クガニ森入口にある井戸跡で、戦前から水は枯れていたが祈願の対象の井泉である。

⑳ 堀川火ヌ神 フッチャーヒヌカン(ヒヌカンヤー)

・戦争前に出征兵士を送るために、堀川火ヌ神の広場にムラの人々が集まった。堀川火ヌ神の敷地は約100坪程度で、〈仲前金城〉との境にはデイゴや松の大木が茂っていた。火ヌ神広場には(真広)が2個ほどあった。

・堀川火ヌ神は、戦後に現在の場所に規模も就職された形で移った。昭和19年で字の戸数は65戸。

・字の組織は、区長1名、カシラ1名、上のシチャヤクグラー1名、下のシチヤヤクグラー1名で、(コウジローさんが12、13歳頃まではワカムンガシラがいたが、戦争前になると、いなかつたようだという)。シチャヤクグラーは配給品の配布などの仕事があった。配給の際には、シチャヤクグラーが(西与儀)の前の広場・(殿内)の横の道・堀川火ヌ神の3ヶ所で太鼓を打ち、集合をかけた。



⑲ 〈仲兼盛〉の所のカ一



⑳ 堀川火ヌ神 地図385



田原ま~い後 講師波平エリ子氏を囲んで懇親会



殿内門中之アシサー



殿内門中之墓



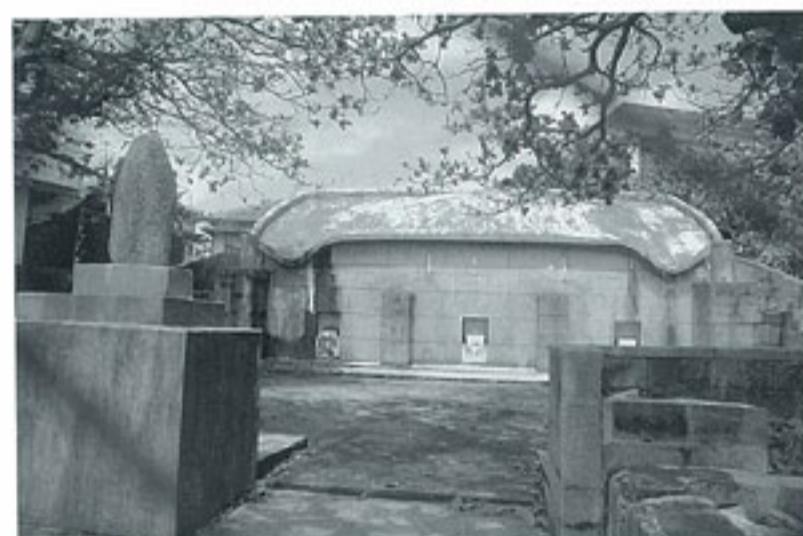
照屋門中之墓



與儀門中之墓



沢城門中之墓



金城門中之墓



内間門中之墓



百次門中之墓